

# 不思議現象とテレビ番組<sup>1)2)3)</sup>

：テレビ番組の内容分析と視聴者の反応

小 城 英 子  
坂 田 浩 之  
川 上 正 浩

## **Paranormal Phenomena and TV Programs : Content Analyses of TV Programs and Responses of Audience**

---

The purpose of this study is content analyses of TV programs concerning paranormal phenomena ("Chojogensho Scoop Summit", "TV no Chikara", and "Aura no Izumi") and analyses of what audiences perceive and feel from the same TV programs. The results show "Aura no Izumi" had comparatively little dramatization and processing, to which audiences had positive attitudes; in contrast, "Chojogensho Scoop Summit" and "TV no Chikara" had much dramatization and processing and were criticized. Six points in evaluating TV programs were found; invisibility of paranormal phenomena, evidence of credibility, purposes of TV program, sensationalism, possibility of bad influences, and skepticism towards TV media.

## 序

心霊現象や占い、UFO (Unidentified Flying Object=未確認飛行物体)、超能力など、現代の科学知識では説明がつかない不思議な現象を総括して「不思議現象」と呼ぶ(菊池, 1995)。先行研究で扱われている主な不思議現象は、占い、UFO・宇宙人、霊、超能力、血液型性格判断、前世・輪廻転生、たたり、神仏の存在・願掛け、死後の世界、予言、迷信・縁起、UMA (Unidentified Mysterious Animal=未確認動物)、コックリさんなどである(小城・川上・坂田, 2006)。

本研究では、不思議現象を扱ったテレビ番組の内容分析と、その視聴者の反応の分析を行い、マス・メディアの影響について考察する。

## 問 題

### 不思議現象に関するテレビ番組

日本で不思議現象に関するテレビ番組が登場したのは1973年ごろである(小池, 1996)。放送が開始された当初から、捏造やトリックが発覚し、マス・メディア内でも批判が繰り返されてきた(朝日新聞, 1974など)。しかし、放送局側は、真実性が追及される報道番組ではないこと、バラエティ番組では娯楽性や視聴率の方が重要であることを主張し、また、視聴者側も、ジャーナリズムの追求よりも娯楽性享受を選び、捏造が判明しても黙認したことが大義名分となって、不思議現象のテレビ番組は存続してきた(小城・坂田・川上, 2007)。

### オウム・ショック

不思議現象を扱ったテレビ番組は高い視聴率に支えられて定番となって

いたが、1995年のオウム事件によって心靈的・宗教的な活動に対するバッシングが激化し、破壊的カルトにつながりやすい超能力や霊視を扱ったテレビ番組も、一斉に自粛された。しかし、一時的に抑圧されたものの、人々の霊に対する関心は根強く、オウム事件を知らない世代の割合の増加と共に、不思議現象を扱うテレビ番組は、破壊的カルトとの結びつきを希薄化した、新たなコンテクストに乗せられて再登場した。オウム事件以前との相違点は、「幽霊」や「靈感商法」などを連想させる漢字表記の「霊」から、カタカナ表記の「スピリチュアリティ」へとキーワードを衣替えし、医療、ひいては科学とも結びついていて宗教色の薄い「カウンセリング」というポジティブな行為と合体したこと、不思議現象の真偽は追及せず、娯楽の側面を強調してエンターテインメントとして享受していることなどである。

#### 先行研究における不思議現象とマス・メディア

日本において、不思議現象信奉とマス・メディア接触との関連を分析した研究では、SF番組やアニメ番組をよく視聴している高校生が不思議現象を信奉しやすく、特に男子ではお笑いや音楽など、テレビの娯楽の影響を強く受けている人ほど、不思議現象の信奉程度が高いことが示されている(松井, 1997)。しかし、坂田・岩永(1998)においては、マス・メディア接触度の高い男性は「超能力」を、女性は宇宙人などの「超生命・超文明」を信奉しているという結果が得られている一方、逆にマス・メディア接触度の高い女性は「迷信」を信奉していないという結果が得られていることに代表されるように、先行研究の知見は一致していない。

#### 内容分析の必要性

不思議現象信奉とマス・メディアに関する先行研究の第1の問題点は、マス・メディアの内容分析を行っていないことである。そこで、不思議現象の対象と、不思議現象が提示されるコンテクストやフレームについて、詳細な分析を行うことを、本研究の第1の目的とする。

## 視聴者の反応の質的検討の必要性

先行研究の第2の問題点は、マス・メディアへの接触行動が、時間や頻度などの量的変数で測定されているのみで、質に関する検討が行われていないことである。マス・コミュニケーションの効果論は、主に選挙報道やデイリーニュースを中心として導き出されているが、バラエティなどの娯楽番組の影響については、ほとんど実証的研究が行われていない。受け手からの信頼度が高いニュース報道と比較すると、より信頼度の低い娯楽番組はニュース報道と同程度に影響力が強いとは考えられず、単純な接触時間の長さだけで、影響力を議論するのは困難である。

また、古典的なマス・コミュニケーション研究では、マス・メディア接触は独立変数として置かれ、受け手の行動や態度は影響を受ける従属変数として設定されており、不思議現象とマス・メディアについて行われた先行研究も、そのモデルに倣っている。しかし、受け手の方の行動や嗜好に焦点を置いた利用と満足研究 (McQuail, Blumler, & Brown, 1972) では、人々がメディアに求め、メディアから満足を得る機能を、気晴らし (日常生活のさまざまな制約からの逃避、苦労や悩みからの逃避、情緒的開放)、人間関係 (登場人物への親近感、社会的効用)、自己確認 (自己内省、現実の探求、価値の強化)、環境監視に分類している。不思議現象とマス・メディアとの関係もまた、受け手の利用と満足という観点から分析がなされるべきであろう。

さらに、不思議現象のテレビ番組が開始された1970年代ごろから、視聴者の中にも「演出だと分かっている、番組が面白ければよい」、「一定の約束ごとの中で、テレビは作られている」など、番組の演出や細部、裏側への関心などの番組を深読みする「熟練性」の態度が生まれてきており、こうした現代的なテレビの見方をする視聴者は、年々増加傾向にある (白石・井田, 2003)。過去には、「NHK スペシャル」など、やらせが発覚して、テレビの信用を著しく失墜させた事例は枚挙に暇がなく (館澤, 1993; 小松, 1994 など)、視聴者の方も、テレビ番組には演出が不可欠で、特にバラエ

ティ番組では捏造にまで至っているケースがあることを認識した上で、不思議現象を娯乐的に享受してきたと考えられる。小城・坂田・川上(2008)でも、不思議現象に対して肯定的な態度を持つ層も、不安傾向や自己認識欲求が強い層と、不思議現象を信奉するというよりは、周囲との調和を重視して、単にエンターテイメントとして楽しむ層とに分離されることが明らかにされている。以上のことから、不思議現象のテレビ番組を視聴した視聴者の反応を、質的に分析することを本研究の第2の目的とする。

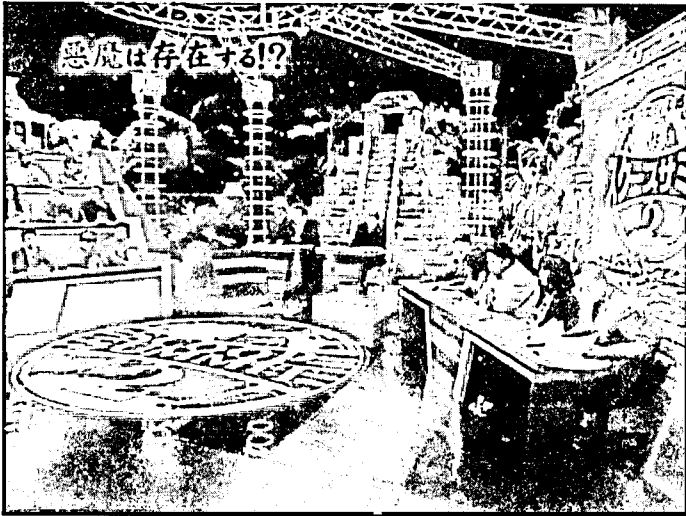
## 研究 1

研究1では、テレビで不思議現象が提供されるコンテキストやフレームを探索的に明らかにするために、任意に選定した番組について内容分析を行う。

### 方 法

調査対象：(1)「ドスペ！世界超常現象審議会議スクープサミット2」(以下「スクープサミット」, 2006年4月22日19:00~20:54放送), (2)「月バラ！オーラの泉スペシャル」(以下「オーラの泉」, 2006年4月24日19:00~20:54放送), (3)「TVのチカラ スペシャル」(以下「TVのチカラ」, 2006年5月15日19:00~20:54放送, そのうち分析対象としたのは霊能者による霊視のコーナー35.0分)。対象とした番組はすべてテレビ朝日系列である。

調査方法：全体の構成や流れ, 出演者について質的に分析を行った後, カメラカット(画面が切り替わるまで)を1単位として, 1カットごとに放映時間, 映像, 発話内容, テロップ内容をコーディングし, 文字数(発話内容を文字に換算), テロップ文字数を算出した。テロップは, 番組によって表示形式が異なるため, メインテロップ, 上テロップ, 左上テロップ, 右下テロップというように各番組のスタイルに応じてカテゴリを設定, カメラカットが切り替わっても同じテロップが表示され続けている場合は, 複



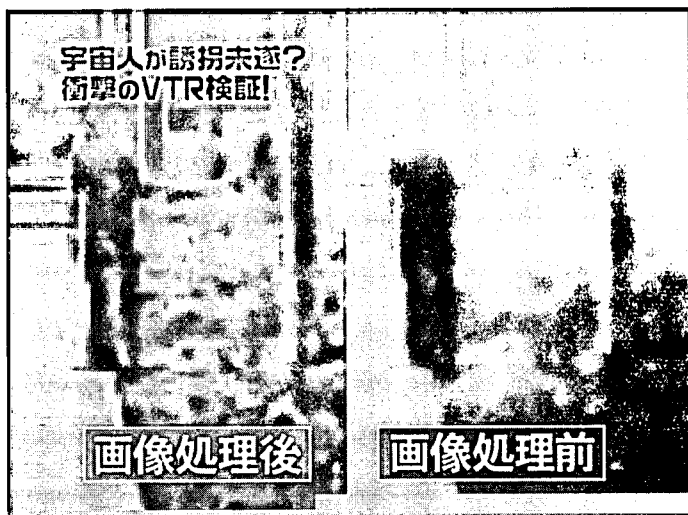
資料 1-1 「スクープサミット」の一場面①



資料 1-2 「スクープサミット」の一場面②



資料1-3 「スクープサミット」の一場面③



資料1-4 「スクープサミット」の一場面④





資料 2-1 「オーラの泉」の一場面①



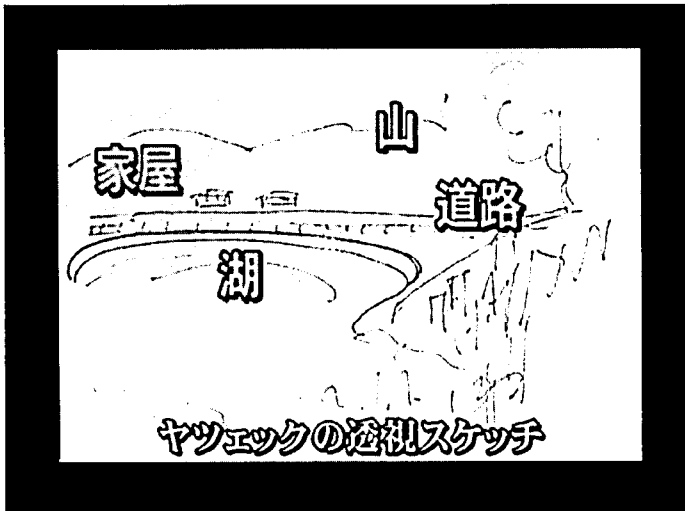
資料 2-2 「オーラの泉」の一場面②



資料 2-3 「オーラの泉」の一場面③



資料 3-1 「TV のチカラ」の一場面①



資料 3-2 「TV のチカラ」の一場面②



資料 3-3 「TV のチカラ」の一場面③

Table-1. 「スクープサミット」データの一部

カメラ カット No.	開始	終了	放送時間	映像	発話者	発話内容	文字数	メインテロップ	左上 テロップ	右上 テロップ	左下 テロップ	右下 テロップ	テロップ 文字数
270	0:21:16	0:21:20	0:00:04	テロップのみ		2006年2月28日	5	2006年2月28日	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				24
271	0:21:20	0:21:24	0:00:04	地図		中国からとんでもない	10		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
272	0:21:24	0:21:26	0:00:02	地図 中国アップ		スクープ情報が飛び込んでき た	14	中国	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				21
273	0:21:26	0:21:29	0:00:03	新聞記事		実は中国の政府機関が	10		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?			「飛騨探案」 より	27
274	0:21:29	0:21:33	0:00:04	記事の写真アップ		25年にわたって発行してい るUFO専門誌が	21		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
275	0:21:33	0:21:36	0:00:03	飛行物体?		南州郊外の上空でUFO大爆 発をとらえたこと報じたのだ	25	UFOが空 中で大爆 発!!	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				31
276	0:21:36	0:21:39	0:00:03	飛行物体?		専門誌を出すほど	0		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
277	0:21:39	0:21:41	0:00:02	中国のテレビ番組		関心を示していた中国では	8		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
278	0:21:41	0:21:47	0:00:06	中国のテレビ番組 (宇宙飛行士)	男性ナレ	20数年前からUFO目撃事件 が多発していた	12	UFO 事件が多発!!	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				29
279	0:21:47	0:21:51	0:00:04	中国のテレビ番組 (ロケット打ち上げ)		一方で急激な宇宙開発が進ん だ	21	有人ロケット「神舟5 号」	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				31
280	0:21:51	0:21:52	0:00:01	中国のテレビ番組 (飛び立つロケット)		中国	2		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
281	0:21:52	0:21:56	0:00:04	テレビ番組を背景に ロケットの写真		突如、世界で三番目に有人ロ ケットの打ち上げに成功	24	世界で三番目の有人ロ ケット打ち上げ成功!	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				39
282	0:21:56	0:21:59	0:00:03	ロケットの写真		その打ち上げの際に、事件は 起こった、あたかも	22		UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				19
283	0:21:59	0:22:03	0:00:04	ロケットの写真 先 端アップ		打ち上げを見守るように UFOが飛来していたのだ	23	UFOが怪獣!?	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				27
284	0:22:03	0:22:09	0:00:06	コックピット?		さらには、UFOのテック/ロ ジ-を機体に入手したという 噂が、	29	中国がUFOの技術を 入手!?	UFOのテック/ロジ- で中国が宇宙開発?				33
285	0:22:09	0:22:16	0:00:07	テロップのみ		驚愕! 中国の宇宙開発は UFOの最新技術を利用して いた?	27	中国が「驚愕! 中国の 宇宙開発はUFOの最 新技術を利用!」?					28

(BS はパストショット)

Table-2 「オーラの泉」 データの一部

カメラ カット No.	開始	終了	放送時間	映像	発話者	発話内容	文字数	メインテロップ	左上テロップ	右上テロップ	右テロップ	右下テロップ	テロップ 文字数
					国分太一	さあ、船越さん、どうぞこちらの方へ、	18		オーラの泉	ハイビジョン製作			13
40	0:05:00	0:05:10	0:00:10	船越英一郎 全身 席へ	船越英一郎	すいません。どうも失礼いたします。	17		オーラの泉				5
					国分太一	よろしくお願いたします。	11		オーラの泉				5
					船越英一郎	よろしくお願いたします。	13		オーラの泉				5
41	0:05:10	0:05:11	0:00:01	国分太一と美輪明宏	国分太一	汁びつよりじやないですか、	14		オーラの泉				5
					国分太一	あそこ立ってただけですよ、	14		オーラの泉				5
42	0:05:11	0:05:21	0:00:10	船越英一郎 BS	船越英一郎	いやいや、何かもう...	12	船越英一郎	オーラの泉				10
					国分太一	その汁は何ですか、	9		オーラの泉				5
					船越英一郎	何年ぶりで緊張しましたよ、こ んなに緊張したのは、ホントに久 しぶりっていう...	40		オーラの泉				5
43	0:05:21	0:05:23	0:00:02	国分太一 BS	国分太一	今、まさに自分が座に...	13		オーラの泉				5
44	0:05:23	0:05:29	0:00:06	船越英一郎 BS	船越英一郎	近づいていっている感じですか、	15		オーラの泉				5
					船越英一郎	振り返れば座ですね、	10	振り返れば座ですね	オーラの泉				14
45	0:05:29	0:05:32	0:00:03	国分太一 BS	国分太一	もう、今日はね、ウソつけません から、はい、	21		オーラの泉				5
					美輪明宏	美輪さんとは共演はしたことはあ るんですか、	21		オーラの泉				5
46	0:05:32	0:05:38	0:00:06	右前方から4人全員	美輪明宏	いや、今日初めて、	9		オーラの泉				5
					船越英一郎	そうなんです、	7		オーラの泉				5
					国分太一	そうなんですか、	8		オーラの泉				5
47	0:05:38	0:05:40	0:00:02	美輪明宏 BS	美輪明宏	まったく初めてお目にかかると、	15		オーラの泉				5
					国分太一	ああ、そうですか、	9		オーラの泉				5
48	0:05:40	0:05:46	0:00:06	船越英一郎 BS	船越英一郎	すぐお会いするの、僕、著し みにささせていただきますので今日は ホントに光栄です、今日は、	43		オーラの泉				5
49	0:05:46	0:05:49	0:00:03	美輪明宏 BS	美輪明宏 全員	苦しみになりますよ (笑)	12		オーラの泉				5
50	0:05:49	0:05:53	0:00:04	国分太一と美輪明宏	国分太一	すてい、ホントに汗かいてますよね、	3		オーラの泉				5
51	0:05:53	0:05:55	0:00:02	船越英一郎 顔	船越英一郎	江原さんとほもう	8		オーラの泉				0
52	0:05:55	0:05:58	0:00:03	江原啓之 BS	江原啓之	ええ、番組でもお世話になってお ります、	19		オーラの泉				5
53	0:05:58	0:06:07	0:00:09	船越英一郎 BS	船越英一郎	ずいぶん前にご縁をいただいて、そ れから、ホントにあの、いろいろ とご相談事をさせていただきましたり...	50		オーラの泉				5

Table-3 「TV のチカラ」 データの一部

カメラカット	開始	終了	放送時間	映像	発話者	発話内容	文字数	メインテロップ	上テロップ	右テロップ	文字数	画面下ワイプ	画面下ワイプ	画面下ワイプ
70	1:02:40	1:02:45	0:00:05	表彰されるヤツコフスキー	男性ナレ	まさに彼は、ポーランド国家が認める、原爆の起爆力若者のだ。	29	ポーランドが認める通説能力者			15			
71	1:02:45	1:02:48	0:00:03	表彰状	男性ナレ	そんなヤツコフスキーが斉藤孝子さん失	0	ポーランドが認める通説能力者			15			
72	1:02:48	1:02:55	0:00:05	斉藤孝子さんの写真	男性ナレ	院の真相に接んだ。	27	斉藤孝子さん失踪に接む			11			
73	1:02:53	1:02:59	0:00:06	コートに渡されるヤツコフスキー	男性ナレ	まずはヤツコフスキーに孝子さんのコー	25				0			
74	1:02:59	1:03:01	0:00:02	コートのおいをかぐヤツコフスキー	男性ナレ	匂いをかぎ、残留思念をたどる。	15				0			
75	1:03:01	1:03:04	0:00:03	何かを奪くヤツコフスキー	男性ナレ		0				0			
76	1:03:04	1:03:06	0:00:02	獲得して早口で話すヤツコフスキー	男性ナレ	すると、数分後に口を開いたヤツコフス	21		北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		27	行方不明者		
77	1:03:06	1:03:13	0:00:07	コートの上においをかぐヤツコフスキー	男性ナレ	さまざまなイメージが脳裏に浮かぶ。	17	さまざまなイメージがヤツコフスキーの脳裏に浮かぶ	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		52	行方不明者		
78	1:03:13	1:03:17	0:00:04	ソファで思索するヤツコフスキー	男性ナレ	彼は頭に浮かんだイメージを整理しながら、失踪後の孝子さんの足跡をたどり始めた。	39	失踪後の孝子さんの足跡をたどり始める	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		47	行方不明者		
79	1:03:17	1:03:21	0:00:04	ソファに座るヤツコフスキー	男性ナレ		0	失踪後の孝子さんの足跡をたどり始める	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		47	行方不明者		
80	1:03:21	1:03:24	0:00:03	ヤツコフスキーのアップ	男性ナレ		0	失踪後の孝子さんの足跡をたどり始める	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		47	行方不明者		
81	1:03:24	1:03:31	0:00:07	ヤツコフスキーのインタビュー	男性ナレ	正方形の公園。彼女はそこへ列車で向かった。	21	正方形の公園へ彼女はそこへ列車で向かった	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		48	行方不明者		中山 秀正
82	1:03:31	1:03:39	0:00:07	ヤツコフスキーのインタビュー	男性ナレ	雪だ、めったに行かない面だ。そこでも誰かど待ち合わせをしている。	31	雪だ、めったに行かない面だ。そこでも誰かど待ち合わせをしている。	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		56	行方不明者		秋野 博子
83	1:03:39	1:03:46	0:00:08	告げにスバルの影、入場オラストラ	男性ナレ	待ち合わせの相手は、孝子さんがスバルの影の時にクラクションを鳴らした人なのか、	41	孝子さんが「スバルの影」でクラクションを鳴らした人か?	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		28			
84	1:03:46	1:03:53	0:00:07	ヤツコフスキーのインタビュー	男性ナレ	聞いて、孝子さんの人間関係について	24	孝子さんの人間関係について	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		20			
1:03:53	1:04:00	0:00:07		ヤツコフスキーのインタビュー	男性ナレ	彼女は2人の男性とつきあっている。1人の男性は愛があるように、	32	彼女は2人の男性とつきあっている。1人の男性は愛があるように、	北海道 33 歳ママ... 佐藤孝子さんが		30			

数のカメラカットに重複してカウントした。最終的に、すべてのカテゴリのテロップを合計したものをテロップ文字数として分析に用いた。番組画面を資料 1-1～3-3 に、データの一部を Table1-1～1-3 に示す。

なお、この他に、情報量の多さを測定する指標として、ワイプと呼ばれる小窓がある。VTR の放映中などに、それを見ているタレントの表情や、別の中継映像などを映す小窓が画面の隅に表示されるもので、同時に多重の情報を提供することが可能である。数量化が困難であるため、今回はワイプの分析は行わなかったが、「TV のチカラ」において多用される傾向が認められた（資料 3-1・3-3 および Table1-3 参照）。

## 結果と考察

### 1. 構成と出演者

#### 1) 「スクープサミット」

宇宙や UMA などの超常現象を 7 事例（「巨大生物」「UFO」「宇宙人の誘拐未遂」「ロシアの悪魔被い」「ヒト型極小生物」「巨大類人猿」「ドラゴンの標本」）を取り上げ、まず VTR で紹介する。「巨大生物」は、巨大なイカやナマズが世界各地で発見されていることを紹介、それが天変地異の前兆であるという流れで構成されている。「UFO」は、中国、韓国、イギリスなどの UFO 目撃談や調査の現状を紹介、中国政府が調査に乗り出したことをセンセーショナルに伝えているが、調査結果は不明である。「宇宙人による誘拐」は、メキシコでサッカーをしていた少年が、電柱の陰に潜む宇宙人に誘拐されかけたという場面を携帯電話の映像で紹介、専門家に依頼して映像を分析したり、実際に現地で現場検証を行ったりしている。「悪魔被い」は、ロシア正教の神父が、悪魔に取り憑かれたという村人から悪魔を追い出す儀式の一部始終を伝えており、村人が金切り声を上げながら、神父に罵声を浴びせ、のたうちまわる様子が克明に描かれている。「ヒト型極小生物」は、地下 15 m に住む体長 7 cm の地底人「トヨール」が存在し、そのミイラの映像を極秘入手した、などセンセーショナルな演出が行

われていた。「巨大類人猿」は、体長3mの「ビッグフット」と名付けられたUMAであり、鳴き声を録音したというテープや、40cmの足跡などが紹介されている。「ドラゴンの標本」は、チベットでの空飛ぶドラゴンの写真や、中国で発見されたというドラゴンの骨を紹介しているが、写真は画像が粗く不鮮明であり、骨は、結局、ドラゴンのものか否か、あいまいなままVTRは終了した。

各事例のVTR後、審議委員と海外特派員が議論して審議を行う。司会はお笑いコンビの「さまぁ〜ず」、審議委員はタレントの黒沢年男、YOU、伊集院光、若槻千夏、勝谷誠彦、鳥越俊太郎の計6名、海外特派員は17カ国から集まった超常現象の専門家とされる人々30名（8割がUFOの専門家）である。伊集院光や勝谷誠彦が論理的に超常現象の存在を否定する（たとえば「日本では地震が多いために、自然現象の異常と地震を結びつけて考えているだけで、他国では該当しない」（勝谷誠彦）、「国家に不都合な情報を隠蔽するために、政府が意図的にUFOや宇宙人に関する情報を操作している可能性がある」（伊集院光）など）のに対して、若槻千夏が「夢がある」といった感情論で反論するなど、同じ次元での議論を避け、平行線を保つように構成されている。

最終判断は審査委員長の鳥越俊太郎が下すが、すべて事例において真偽を断定せず、続行審議となっており、本番組の目的は超常現象の真偽の決定ではなく、不思議さや賛否の議論を楽しむところにあると考えられる。テロップやBGM、ナレーションなどの加工が多く、また、番組進行の至るところで司会の「さまぁ〜ず」による物真似やギャグを盛り込んで娯楽性を強調しており、バラエティ番組の中でも「お笑い」の要素が強い（資料1-1～1-4）。これらの特徴は、2000年以降のスピリチュアル・ブームに乗って再登場した不思議現象の番組は、真偽の断定を避け、娯楽性を強調しているという堀江（2007）の指摘と整合的である。



## 2)「オーラの泉」

出演者は、司会を務めるタレントの国分太一、「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之、江原啓之をサポートする美輪明宏の3名である。通常は1名のゲストを招く30分番組であるが、調査対象となったのは2時間のスペシャル番組で、3名のゲスト（俳優の船越英一郎、ピアニストのフジコ・ヘミング、タレントの長谷川理恵）が登場、1人のゲストにつき、平均24.7分を費やしていた（CMを除く）。

まず、ゲストが登場すると、ナレーションが「怖いものは何ですか」「最近見た夢は？」といった質問を行う「スピリチュアル・チェック」があり、ゲストが簡単に答える（フジコ・ヘミングの場合は、スピリチュアル・チェックはなく、本人によるピアノ演奏の披露であった）。その後、前半はスピリチュアル・チェックに基づいて、ゲストの半生を振り返りながら、主に国分太一と美輪明宏がインタビュアーを務め、ゲストの素顔を紹介する。後半は江原啓之がゲストのオーラや前世・守護霊について霊視、アドバイスを行う。実質的にゲスト・タレントの紹介であり、インタビュー番組と同義である。同じインタビュー番組の中でも、司会者とのやりとりが中心で、仕事などのパブリックな側面を主に紹介する「徹子の部屋」（テレビ朝日系列）や、再現ドラマやVTRを多用して、仕事も私生活も含めたゲストの半生全般を紹介することが主たる構成となっている「いつみても波瀾万丈」（日本テレビ系列）に比べて、「オーラの泉」は、本人のトークを中心に、家族関係の確執、本人が抱えてきた心のしこりとなる出来事など、ネガティブな側面も含んだ、私人としての内容が中心である。

再現映像はなく、用いられるのは実際に撮影された当時の写真のみで、大半がスタジオ・トークで構成されている。テロップは、キーワードの強調や要点の整理の役割として登場するが、他の2番組と比べると、文字数も登場回数も少なく、控えめである。トーク中のBGMもほとんど入らず、ゲストの生の声を生かす演出になっている。ゲストは心のしこりを吐露し、「スピリチュアル・カウンセリング」を受けて、立ち直りや自己分析のき

っかけをつかんで帰っていく。スピリチュアリティを前面に出した番組構成でありながら、江原啓之と美輪明宏だけでは霊能一色になるところを、国分太一が一般人の代表として要所でユーモアを交えて茶化したり、笑いをとったりすることによって、親しみやすさを演出し、スピリチュアリティに対する抵抗感を薄めている（資料2-1～2-3）。このような娯楽性の演出は、前述の「スクープサミット」と同様であるが、「スクープサミット」がお笑い芸人のさまぁ〜ずを起用して、「お笑い」の要素を前面に打ち出しているのに対し、バラエティ慣れしてはいるものの、「お笑い」としては素人の国分太一を起用することによって、人工的ではない、自然なユーモアを演出していると推察される。

### 3) 「TV のチカラ」

失踪事件や未解決殺人事件などを取り上げ、探偵が再捜査を行ったり、失踪者に連絡を呼びかけたり、視聴者からの情報提供を募ったりする番組で、実際に解決に至った事件もある。出演者は、レギュラー司会者の高橋英樹、東ちづる、中山秀征の3名に加えて、この放送日のゲストが元警視庁刑事、元東京地検検事・弁護士、法医学教授の専門家3名に、女優、落語家の2名、合計8名であった。生放送で、番組中に視聴者からの情報提供を受け付けている。通常は1時間番組であるが、調査対象となったのは2時間のスペシャル番組で、事例1「足跡判明 埼玉 21歳ママ カギ握る人物…H氏」、事例2「田園調布 23歳 ママは大学生 8歳娘 & 母 SOS」、事例3「熟年離婚 60歳妻が宣告 結婚40年 夫涙 SOS」、事例4「急転 北海道 33歳」の4事例が取り上げられていた。そのうち、分析対象となった放送は、北海道で失踪した33歳の女性を捜索するという事例4（48分11秒）の中で、ポーランドの3人の霊能者（クシストフ・ヤツコフスキ、ヤツェック・ボンボレフスキ、ハンナ・ボドヴィチ）が霊視を行ったコーナーで、35分0秒（この事例の中では72.6%、全放送時間中36.7%）を占めていた（CMを除く）。

霊視のコーナーは、VTR による事件・霊能者・霊視結果の紹介で構成されている。3 人の霊視結果が一致したとして、該当の湖の搜索までが描かれているが、番組中に事件解決には至っていない（2007 年 6 月 30 日番組終了、2008 年 5 月現在、事件解決の報告はない）。番組中では超能力捜査に関して全面的に肯定しているわけではないが、霊能者が過去に解決した事件の紹介や、ポーランド警察による権威づけなどが行われている。カメラカット数が多く、BGM や効果音を多用しており、テロップも頻繁に入れ替わる。VTR 中、画面にはメインテロップの他に、右側・上部にも別テロップ、右上に失踪女性の顔写真、右下に VTR 視聴中の出演者の表情をリアルタイムで示すワイプ映像というように、同時に多くの情報が発信されている。VTR が終了すると、スタジオで出演者が感想や意見などを語り合うが、合間に別の事件の情報提供などが挿入されて頻繁に中断される。スタジオでは BGM は入らず、電話のコール音やテレフォンアポインターの応答などのノイズを生かしており、事件の緊迫感と生放送のライブ感を強調する演出となっている（資料 3-1～3-3）。実際の殺人事件などを扱っていることから、お笑いやユーモアの要素はないが、本来は事件性のない事例であっても事件として煽る（たとえば事例 3 など）ような、センセーショナルな演出が行われていた。

## 2. カメラカット・発話・テロップの比較

各番組の CM を除いた総時間、カメラカット数、発話文字数、テロップ文字数を Table 2 に示す。番組を独立変数、1 カットあたりの放映時間、発話文字数、テロップ文字数をそれぞれ従属変数とする一元配置分散分析および多重比較を行った（Figure. 1-1～1-3）。放映時間／カットについては、すべての番組間で有意差が見られ、「オーラの泉」がもっとも長く、次いで「TV のチカラ」、もっとも短いのが「スクープサミット」であった（ $F=87.40, df=2, 2506, p<.001$ ）。発話文字数／カットについては、「スクープサミット」・「TV のチカラ」と「オーラの泉」との間に有意差が見ら

Table2 各番組のカメラカット数・発話文字数・テロップ数

	スクープサミット	オーラの泉	TVのチカラ
CMを除いた総時間	1時36分44秒	1時34分08秒	0時33分43秒
カメラカット数	1275	822	301
発話文字総数	29993	31548	7952
テロップ文字総数	43808	20514	12926

れ、他の2番組に比べて「オーラの泉」が少なかった( $F=543.86, df=2, 3243, p<.001$ )。また、テロップ文字数/カットについては、すべての番組間に有意差が見られ、「TVのチカラ」がもっとも多く、次いで「スクープサミット」、もっとも少ないのが「オーラの泉」であった( $F=193.51, df=2, 3243, p<.001$ )。

したがって、「スクープサミット」・「TVのチカラ」は、VTRのナレーションも含めて出演者の発話量はほぼ同じであるが、「スクープサミット」はカメラカットが短く、頻繁に切り替わるのに対して、「TVのチカラ」の方は画面上のテロップ文字数が多く、視覚的な情報提供が多い点で異なっているといえる。今回は分析を行っていないが、「TVのチカラ」ではワイプが多用されていることを踏まえると、「TVのチカラ」においては、同時に画面上で多重の情報提供が行われていることが特徴的である。一方、「オーラの泉」は、カメラカットが長く、出演者の発話量もテロップも少なく、他の2番組に比べると、特にゆったりとした構成になっていることがわかる。

## 研究2

研究2では、研究1で内容分析を行った3番組について、視聴者の認知や反応を質的に分析することを目的とする。

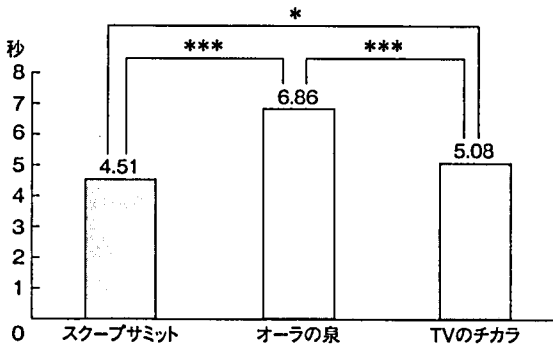


Figure1-1. 放映時間/カットの比較

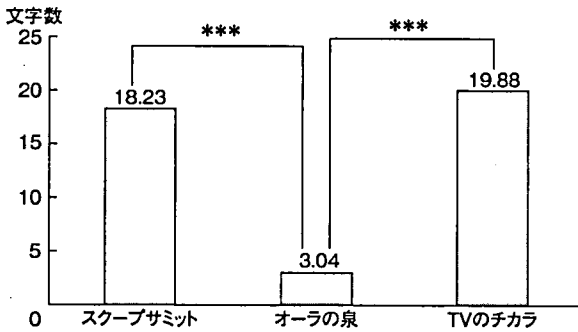


Figure1-2. 発話文字数/カットの比較

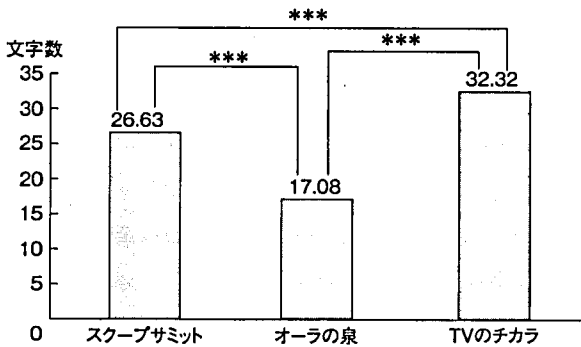


Figure1-3. テロップ文字数/カットの比較

## 方 法

調査対象者 大学生女子（「スクープサミット」「オーラの泉」94名；「TVのチカラ」80名）

調査時期 2006年4月～5月

調査方法 研究1で用いたテレビ番組を視聴させ、感想を自由に記述することを求めた。

## 結果と考察

### 1. 「スクープサミット」

ごく数名が「悪魔はいるのかもしれないと思った」、「超常現象に興味を持った」といった評価をしていたが、「番組内容に関心を持てなかった」「興味がなくて見ているのがつらかった」といった回答が圧倒的多数で、3番組の中ではもっとも評価が低かった。

#### 1) 番組の目的の不明瞭さと出演者の不一致

「番組制作側が、本当に超常現象を解明する目的で番組を放送するのであれば、おちゃらけたムードは必要ない。もともとバラエティとして番組をつくって視聴率をとろうとしているので、専門家たちも、サミットに提出されるテーマも、余計に嘘くさいように見えてしまった」、「テレビ番組を作る側の面白おかしくしたいという意図が見え見えだと思った。やたらとコマーシャルで興味を引き伸ばそうとしている点や、時間内に多くのネタを取り上げている点からもうかがうことができる。視聴者を飽きさせないようにするために、数で勝負していると思った」、「証拠にもならないものを並べて超常現象や未確認生物は存在する、とアピールする内容には啞然とし、特に後半は見続けることに苦痛を覚えた」など、番組の目的自体が不明瞭で、内容が浅薄であることに批判が集中した。

さらに、出演者については、「出ている人もお笑い芸人ばかりで信憑性に欠けるし、『17カ国30名の特派員 VS 5名の審議委員』という設定も意味不明」、「お笑い要素の強いあの中で鳥越さんが真面目に話す姿は、こ

の番組をさらにお笑い要素の強いものへと変化させているようにしか見えなかった」、「外国人記者クラブと呼ばれている出演者たちも、単なる『外タレ』と呼ばれている人たちなんじゃないの？と思わずにはいられなかった。特に日本人の〇〇研究家といった人たちなんかは、うさんくさいことこの上ない」など、不満と疑問が多かった。これらの回答から、番組の目的が不思議現象の現実性の検証であるならば、論理的・科学的な調査結果とそれに見合う出演者を、番組の目的が娯楽であるならば、完全に計算されたお笑いにて化してプロのタレントを用意すべきであり、本番組はいずれも中途半端であったために、目的が不明瞭で、視聴者からの不満が募ったと推察される。

## 2) 証拠のずさんさ

「どの『証拠』映像も例外なくボヤけていて、はっきりと視認できないのもあまりにお粗末。あの程度の映像であれば自分でも作れるし、しかるべき機材があれば子供でも簡単に作ることができる」、「世界の大発見といっておきながら、携帯の写真しかなかったり、今時カセットテープでの録音しかないというところなど、ここまでくるとさすがにインチキとしかいいようがない」など、番組中で、超常現象の証拠として提示された写真や映像は画質も悪く、また入手ルートも不明で、情報そのものの信頼性が疑わしいため、各事例の検証がずさんで説得力に乏しく、各事例に捏造の可能性が高いという印象を視聴者に与えたことが評価の低さの要因として挙げられる。

## 3) 脚色・加工に対する批判

「このような番組には欠かせない不思議な感じ・恐ろしさを感じさせるナレーションや言い回し・効果音なども、何とか興味を、それに伴う数字を得ようとしている制作側の意図が見えて、まるで腕のないお笑い芸人が、無理矢理、変顔や仮装で人を笑わせようとしているようで、逆にしらけて

しまった」,「テレビ番組ではほとんどそうだと思うが,ひとつひとつの内容に出演者や観覧者の反応が良すぎるのが少し気になった。『え〜〜!!?』とか会場が一体になったざわめきによって, 見ている人を引き込もうとしているような印象を受けた」,「ゲストたちが大げさに驚いたり騒いだりする様子がますます『やらせ』のように感じさせる」など, 過剰な脚色や加工も, 関心を低下させる要因であることがうかがえる。

#### 4) グロテスクな映像への恐怖と不快感

本番組で取り上げられた事例の中には, 悪魔祓いの儀式など, 映像がグロテスクで, ホラー映画を彷彿とさせるものが含まれていた。そこから, 「悪魔祓い・ヒト型極小生物(トヨール)は映像が恐くてほとんど直視できなかった。普段だったら間違いなくチャンネルを変えと思う。悪魔の存在は絶対に恐くて認められない。認めたら, 夜も眠れない気がする。この番組は, どの項目もかなり信憑性に欠けて, 司会者やゲストがお笑い芸人であるにもかかわらず, 映像がグロテスクなものが多かった。この手の番組はこれから出来ることならあまり見たくない」など, グロテスクな映像に恐怖や不快感を煽られ, 番組の視聴自体を回避したいという反応を示す回答者もいた。

心像鮮明性の高い受け手は, ショッキングな映像に具体的で生々しい想像をめぐらせ, 視聴したときの感情を繰り返して再体験すると指摘されている(Sparks, Sparks, & Gray, 1995) ことや, 恐怖が強すぎる場合には説得効果が低下するという Janis & Feshbach (1953) の研究知見から, グロテスクな映像は視聴者に不快感を与え, テレビ番組の視聴自体を回避させようとする心的力動を働かせる可能性のあることが示唆される。

#### 5) 論理的批判への賛同

視聴者の回答において, 感情論や, 一方的に超常現象の存在を主張する議論に対しては, 批判が多かったが, 前述の伊集院光や勝谷誠彦のように,



論理的に超常現象を否定する議論を支持する回答が多かった。たとえば、「動物の異常行動は、大地震の予兆であるという考えは、地震国だから生まれたのだという見解に私は強く共感を覚えた」、「UFO は軍事的な秘密を隠すためであるという意見は興味深かった。このような、より現実的な可能性を考えた意見は、この番組に信憑性を持たせると思った」、「番組中に伊集院光が言っていたように、アメリカ・ロズウェル事件もアメリカが核実験に失敗したことを隠蔽するために作りあげた話なのかもしれない」、「コメンテーターとして出ていた伊集院光の発言が、超常現象を越えて、現実的、かつ理論的で、『トリビア』なネタが多く、超常現象の VTR を見るより楽しかった」などである。そこに本番組の魅力を見出したという回答もあった。

#### 6) テレビの裏側に対する猜疑心

「リアルタイムに起こっている物事を放送していないかぎり、その映像が正しいとは言い切れず、その映像自体に事実が隠蔽されたり、脚色されたりしている可能性は充分にある」、「この番組に限らず、こういった内容の番組を見ると『これはテレビ局が操作している』と心のどこかで思ってしまい、素直に反応できない」、「所詮、人間が裏で操作していることなのに、なぜ時間を割いてテレビ番組を作るのか、しかもよくこの手のテーマの番組が最近多くなってきていることに私はとても不思議」などの回答から、視聴者が根底において、テレビやバラエティ番組そのものに対して猜疑心を抱いていることがうかがえる。

さらには、「不毛な論議を真剣な顔で論じている人たちを、ブラウン管の向こうから笑って楽しむ。この番組を通じて、それがこういった『壮大なヤラセ』番組の正しい見方ではないかと思わされた」、「あまり冷めた視線で見ってしまうと、番組が面白くなるので、UFO や宇宙人や未確認生物を信じてやまない人々まではいかなくとも、(存在するのではないかと)少し期待しながら見れば、とても楽しく観覧できる番組だなと思った」と

いった、シニカルな視聴態度を示す回答が得られたことも特徴的であった。これらの回答は演出や捏造があることを認識した上で、それすら楽しむという視聴態度がうかがえ、バラエティ番組に対して、前述の「現代的なテレビの見方」をする視聴者がいることを裏づけるものといえる。

## 7) スリル希求

「視聴者が求めているのは、このようなもっともらしい議論ではなく、ひたすら衝撃映像だったと思う。『スタジオ・トークなんて知らない』と、多くの人が思っていたのではないだろうか」、「全体的にどの話も聞いたことがある内容ばかりで興味が湧くような魅力のある番組ではなかった。話題としての新鮮さに欠けていたと思う。もっと目が離せないようなスリルや刺激が欲しい」、「議論という形は新鮮で良かったと思うが、途中で話していることが聞き取れなかったり、専門家同士が熱く語り始めて話が分かりにくい部分もあったのが残念だった。もう少し会話にテロップなどをつけてもらいたかった」など、もっとセンセーショナルな内容や、演出を求める声もあった。

## 2. 「オーラの泉」

視聴態度は「自分のオーラや前世も見てほしい」、「今後もこの番組を見たい」といった信奉の態度と、「霊視が客観的に正しいという証拠がない」、「話術のトリックの可能性がある」、「霊感商法につながる危険性がある」といった懐疑的態度の両極に分かれた。

### 1) スピリチュアリティ信奉

「占いや超能力といった番組はヤラセが多いと聞くが、江原さんの場合は、誰も泣かない人はいないというほど、相手のことを的確に当ててしまうので本当にすごい。素晴らしい力を持った人だなと思う」、「江原さんと美輪さんから色々なことを学べるので個人的にとっても好きな番組。彼らは

茨の道を通ってきた方々であるので、パワーもありつつ経験から教わった知恵を持っている部分がベストマッチして、私はリスペクトしている」、「彼の唱える精神論はとても説得力があるし、毎回なるほどと思ってしまう。彼は偶然などない、すべて必然なのだと言っているが、それは確かに生活の中で感じることもある。それに、そう思ったほうが人生を生きやすいような気がする。彼がすごいのは、その人と初対面なのにもかかわらず、その人の家の様子や生活などを透視してしまうところだ。でたらめを言っているのかそうではないのかは透視された本人の様子を見れば一目瞭然だ。あの驚き方は演技ではないと思う。間違いなく彼には普通の人には備わっていない何か不思議な力が宿っているのだと思う」など、程度の差はあるものの、江原啓之と番組が演出するオーラの世界を信奉する回答が、明確に見られたのが特徴的である。3番組の中では、もっとも不思議現象が容認される傾向にあった。

さらに「私も江原さんと美輪さんに是非とも鑑定していただき、素敵なアドバイスがほしいと考えてしまった。この2時間で私の人生に少々影響を与える言葉を何度か聞いたので、この番組を見たのも何かの縁と考えて、自分を見つめ直し、良い方向へつなげていきたいと感じた」、「初めかなり疑いながら見ていた私も、番組が終わったときには、出来ることなら江原さんや美輪さんに実際会って自分の前世や守護霊を見てもらい、これから自分がどうすれば良いのか教えて欲しいと感じた」など、今までは江原啓之の霊視に対して懐疑的であったのが、本研究の課題でこの番組を視聴したことによって、態度が変容したという回答もあった。あるいは、「私は超常現象や不思議現象を信じていないし、こういったテーマを扱ったテレビ番組は好きではない。しかし、江原さんに私のオーラをみて欲しいと思った」、「あまりにも不思議なことなので信じがたいこともあった。でも、江原さんに自分のオーラや前世を見てもらいたいという、矛盾している感情も生まれた」など、番組視聴後も懐疑的態度は変わらないが、自分のオーラや前世に関する情報には関心を持ったとする回答もあった。

## 2) 懐疑

スピリチュアリティが受容される回答の一方で、スピリチュアリティを全面的に否定する回答も同等に見られた。たとえば、「そのうさんくさい解説と、お涙頂戴的な番組の演出にあきれてしまった。『オーラ』と彼らは呼ぶその物質をベースとして人々に己の価値観を押し付ける。これは私に言わせれば一種の宗教であり、それを公共放送で放映するということに疑問を覚える。この番組こそ、ある種、現代社会のIT化にのっとり、テレビという手段でブラウン管の向こうの視聴者に対して宗教活動を行っているように見えるのだ。背後霊やオーラなど一般人にはわからない、肯定することも出来なければ否定することも出来ない物質を使って、さももっともらしく交信し、解説するのだ。クライアントは一種の催眠にでもかかったかのように江原氏や美輪明宏の言うことに強うなずき、涙する。私はこの異常とも言える光景を見て、感動するどころかしらけてしまった」、「私は涙もろく、よくもらい泣きもする性格だが、クライアントの涙を見ても、なにも思わなかった。むしろ全国的に有名で人気があり活躍している人たちさえも、この番組にクライアントとして訪れ、最終的には人生を諭されて導かれ、それに深く感動し感謝して帰っていく、という事実が、私たち一般人のこの番組への興味を煽っているのだらうと思い、またしらけてしまった」、「江原氏と美輪氏の間で意見の対立が起こったり、違う守護霊を感じたりしないのには不信感が募る。やはり、2人とも仕事としてうまく相手に合わせているのかな、と思ってしまう」、「当たり外れないようなことを言われれば、少し違うと思っていっても、さらっと流してしまう。番組のゲストのプロフィールを調べれば、いくらでも『あたかも占いをしたかのように』言うことができる」、「ゲストも一緒になって『演技』をしている場合もあるかもしれない」など、批判・懐疑は、主として暗示やバーナム効果 (Meehl, 1956) を利用している可能性や霊視の客観性の薄さに対して向けられているが、ゲスト・タレントも巻き込んだ壮大な

捏造の可能性を指摘する回答も含まれており、テレビに対する基本的不信感もうかがえる。

### 3) 普遍的人生訓への共感

特定宗教に対する警戒心の強さが日本人の宗教性として指摘されており(堀江, 2007), また, オウム・ショックの余韻から, 江原啓之の霊視には, 未だ抵抗感を抱く層もいると推察される。しかし, 彼のアドバイスは, 実質的には「亡くなった人に束縛されずに, 前向きに生きていくこと」, 「親子の縁を大事にすること」といった至極一般的なものであり, 霊視を警戒する層も, 道徳的教えに通じる普遍的な人生訓は比較的受け入れやすいようである。たとえば, 「良いものを得られたのは, 出演者だけでなく, テレビを通して私たち視聴者に訴えかけ, 伝わるものがあったからだと思う。たとえば、『理屈ではなくハート』『看取ることは尊いこと』『人生についての正負の法則』『なぜ感謝する心が足りなく, 人間はみなもっともっと欲張るのだろうか』など, これらのことは, きっと誰もが通りぶつかる悩める壁だと思う」, 「『オーラの泉』で話していたことは, ゲストだけでなく, 私たちの普段の生活の中でも心に留めておかなければならない大切なことがたくさんあったと思う。私が心の響いた言葉は, 『自分の中の幸せを見つける』という言葉だ。幸せは人それぞれ違うもので, 人が決めるものではないが, 人と比べてしまうときがある。そんなときはその言葉を心に留めておきたいと思った」, 「オーラの泉ではゲストが司会者3人とカウンセリングするように過去を振り返って話していたが, このように自分の人生を振り返る行為は良い行いなのではないかと感じた。振り返ることで, 自分の運命の分岐点, 反省すべき点などを見つけ出すことができるのではないか。過ちや悔いを話すことで精神的にもすっきりできるし, 更にこれからの人生を後押ししてくれるオーラや霊などのお告げをしてくれるなど, 忙しい現代社会に疲れた人間の求めているものが投影されているように見えた」, 「江原さんが言っていることは誰にでも当てはまるような一

般論であり、皆に共通する道徳的なものや礼儀だと思う。だからこそ視聴者も自分に置き換えて考えることができ、自分の行動を振り返ってみたりして楽しめるのだ」などである。

#### 4) 自身の癒し

「見ていると自分も癒されたし、落ち着いたり、心が優しさを取り戻せたような気がする。心を許している出演者を前に、自分自身もいつの間にか心を許しながら見ていた。自分の目からも涙が出ていた」、「意外にも『信じる』『信じない』にかかわらず楽しむことができた。あらかじめゲストについてリサーチしておき、台本を用意するなど、この手の内容はいくらでも作ることができると思うが、しかし、それでも視聴者がたくさんいるということは、要は『信じる』『信じない』の問題ではなく、この番組が安らぎの場となったり、自分を省みることができるから楽しめるのだと思う」、「江原氏に実際に霊が見えているかどうかは未だに時々疑問を感じることもあるが、それでも彼のアドバイスに時に涙を浮かべながら聞き入っているゲストの姿に、私も同時に癒されている。『霊』や『前世』といった、得体の知れないものを引き合いに出してくることで、今までの自分の悩みや負い目を軽くしてくれる、そういった『癒し』を、視聴者は番組を通して求めているのかもしれない」など、番組を通じて自分自身が癒されたり、自己を確認できたりしたという回答があった。利用と満足研究の「自己確認」に該当する魅力と考えられる。

#### 5) カウンセリング的な効果に対する好感

霊視の真偽やプロセスはどうあれ、また、霊視を除外しても、結果としてのカウンセリング効用を評価する声もあった。たとえば、「同じような非科学的な内容を扱っていても、『スクープサミット』が視聴者の不安を煽るような番組構成であるのに対し、『オーラの泉』は、カウンセリング的な要素（視聴者を安心させる要素）が非常に強いと思った。雰囲気も『ス

クープサミット』と比べて落ち着いているのは、ゲストによるトークが番組の中心であり、スピリチュアルな話はあくまで脇役にとどまっている点によると思う。「たとえゲストの自己満足だといわれても、江原さんの死者との対話で解決の方向に導かれるなら、それはそれでいいと思う」、「彼を否定しているわけではない、彼の発言によって励まされたり感動したりする人がいるのは事実で、そのことは決して悪いことではないと思うからである。つまり、彼はカウンセリングをしているのだと思う。現世では解決できないような悩みをもった人たちを安心させることを目的としているのだと思うし、それに特に霊視は必要ないのではないかと思った」などである。

このとき、占い師の細木数子が参照されることが多く、威圧的な細木数子を比較対象とした場合に、江原啓之の受容的で温かなキャラクターが好意的に評価されていた。「私は、細木数子が好きではない、相手に対して地獄に堕ちるだとか、怖いことを言うこともしばしばある、『ズバリ言うわよ』などと言っているが、あれは傷つけているようにしか見えない。江原さんは相手を考え、優しく、思いやって話している」、「今回初めて江原氏の姿を見たが、細木数子氏とは違い、相談者に対して叱ったり批判することはせずにその人の生き方を肯定するような感じだった」などである。その一方で、「すべての話が綺麗にまとまりすぎている。同じ霊関係として、六星占術の細木数子のほうが良いところも悪いところも的確に言っているのでまだ真実味があると思う」といった正反対の意見もあった。

## 6) 出演者の役割への着目

江原啓之がメインの霊能番組であるが、レギュラーの美輪明宏と国分太一の2名が番組において果たす役割についても言及されていた。また、ゲスト・タレントは毎回入れ替わるものの、実質的にゲスト・タレントのインタビュー番組であることから、その魅力は番組に対する態度を左右するものといえる。

### ①美輪明宏の役割

江原啓之には懐疑的であっても、文化人としての美輪明宏が彼を支持することによって、信頼を高めている側面が指摘された。たとえば、「美輪さんは、人とはかなり違った雰囲気を持っている方だ。本も出版されていらっしゃるって、私も拝見したことがあるが、どのお話も真をついたものであり、どこか悟っていらっしゃるような雰囲気がある。『人生に対して悟りを開いている人』というような印象がある。番組の中で、美輪さんは全面的に江原さんを信頼し、時には美輪さん自身の見解も付け加える。すると、江原さんの言葉だけでは半信半疑だった私は、なぜか美輪さんのコメント一つで『本当かもしれない』と思うようになるのだ」、「美輪明宏氏は、自分の人生経験や様々な人と出会いを通して感じてきたことを、ゲストに伝えていた。江原氏のように得意げに振舞ったりせず、筋の通った話が多かったように思う。また、彼は博識で、様々な文化のことを語ってくれた。やはり実際に『才能がある』人の話には、素直に耳を傾けられるものかもしれない」などである。

### ②国分太一の役割

美輪明宏が江原啓之をサポートし、江原啓之に懐疑的な視聴者も説得する役割を果たしていることが回答から明瞭に読み取れたのに対して、主として司会・進行を務める国分太一の役割は、視聴者の目から見て不明瞭であったようである。「この番組にツッコミを入れさせてもらおうとすれば、国分太一さんの番組内の位置付けはどのようなものなのかということだ。実際、番組中にしゃべっているのは、美輪明宏さんと江原啓之さんであって、国分さんは番組の進行もしているが、大抵は傍聴者のように、ただ座っていることが多いような印象を受けた。なぜ彼の名前が番組名の最初に載っているのかがよくわからない。やはり、国分太一さんのファンを狙ってのことなのだろうか」、「江原さん、美輪さんという不思議な力を持つ2人に変な魅力を感じる人が多いのだと思う。しかし、この2人だけでは若い人に受けないと考えた番組側は、ジャニーズである広い層にも人気で、



比較的あまり目立たない国分太一さんを交えている気がした」など、靈能色の強い江原啓之・美輪明宏のコンビネーションを損なわない無色透明なタレントを起用しつつ、かつ、視聴者層拡大を意図しているのではないかという推測が見られた。

### ③ゲスト・タレントに対する印象評定

#### a. タレントの素顔とイメージ・アップ

本番組は、実質的にゲスト・タレントを紹介するインタビュー番組であり、ゲスト・タレント自身が番組の魅力に寄与している側面も指摘された。たとえば、「CMやマラソンのときの長谷川さんとはかなりイメージが違い、意外な一面が見られた気がする」、「番組の開始時と終了時ではゲストに対するイメージが変わる。マスコミでたたかれている芸能人、よいイメージを持っていなかった人も、どの人も親近感がわくというか、悪い人には見えなくなる」、「ゲストそれぞれのユニークな経験やキャラクターが前面に出ていて、視聴者がその人に対し感情移入したり、自分の人生と重ね合わせたりできる構成になっているところに好感が持てた。とりわけ、フジコ・ヘミングが自身の半生を振り返るところでは、スピリチュアルな話云々を抜きにして、素直に感動した」など、今まで知らなかったゲスト・タレントの素顔を垣間見たり、プロの世界を知ったりすることの魅力が挙げられた。

また、人生の挫折を経験したゲスト・タレントに対しては、「この番組に出たことが彼女にとっての出発点になればいいと思う」、「現状から早く立ち直ることはなかなか難しいかもしれないが、長谷川さんが再び新しい人生を歩むことが出来るよう、番組を見ている視聴者という立場からエールを送りたくなった」など、支援的な感情が生じており、番組出演が結果的にタレントに対する親近感を高めることに寄与していると推察される。

#### b. タレントへの同一視

「このテレビで『私』だけでなくみんな同じことで悩み苦しんでいるんだ、と再確認した。だから、私自身小さくなってウジウジ悩んでいる

自分がバカらしくなったりした。きっとこの番組を見て、元気や何かしらを得られた人は、私を含め少なくともいると思う」などの回答から、ゲスト・タレントを同一視し、自分を重ね合わせて見ていることも推察される。スピリチュアルを枠組みとしながらも、主体はゲスト・タレントの紹介であり、利用と満足研究 (McQuail, Blumler, & Brown, 1972) で指摘されているタレント自身への同一視や、自分を対比させたときの自己確認、情報収集などが最大の魅力と考えられる。

c. タレントに対する懷疑

一方、そうしたゲスト・タレントの素顔でさえ、すべてが意図的に作られたものだと言う懐疑的な態度も見られた。「はっきり言って船越英一郎の話なんてどうでもいいと思った。彼らは自分たちの株を上げるために番組に出ているとしか思えないからだ」、「前世について言い当てられたゲストの方々が泣いていた時はびっくりした。正直、ヤラセで泣いているのではないのかと思ってしまった」、「人生の悩みというよりも、自分の不幸自慢の様相を呈しているようで、『それはいかがなものか』と思った。番組で語れるくらいなのだから大したことではないのではないかと、少々穿ったことまで考えてしまった」、「本気で江原氏に話を聞いてもらいたいなら、個人的にすればよいことで、番組に出る、というところで彼女の『思い』はビジネスになってしまったように感じた」などである。

d. ゲストのキャスティング

ゲストのキャスティングについては、「残念だったのは、出てきた芸人・有名人のキャストだった。2時間のスペシャル番組なのに、ただ人数が1人から3人に増えただけで、やっていることは普段と大して変わらなかった。もっと視聴者が興味をひくような、今話題の芸人を使ったり、連れてくる3人に何らかの一貫性を持たせて3人の違いを比べられるようにするなどの工夫をもう少ししてもらいたかった」という不満が寄せられた。

### 7) 弊害や危険性の察知

「この番組を見て少し怖いと思った。街中やニュースでは宗教に対して警戒するのに、なぜ、こういったテレビ番組では取り上げられ、人気番組になり、多くの人の共感を得ているのだろうか。信教は個人の自由であるが、ただ、公共の電波を使うものはもっと考えるべきである。また、見る側にも責任があるので、賢く選ばなければいけない」、「結局、相談者に霊的なものへの依存心を植えつけてしまっはその人を救うことにはなりえないと思う」など、バラエティ番組から盲目的な信奉や宗教依存へ誘導される危険性が指摘された。

### 8) 視聴態度に対するパーソナル・ネットワークの影響

前世やオーラに関する信奉態度の規定因の一つに、パーソナル・ネットワークの影響が挙げられる。「私の仲の良い友達が幽霊をみえるらしく、その話をよくきくようになってから信じるようになった。彼女の話はとても信憑性があり、すっかり信じてしまった。それからというもの『オーラの泉』は楽しい」といった回答から、身近なオピニオン・リーダーが不思議現象に対して肯定的な態度を持っていると、それに影響されて、テレビ番組に対する反応も左右されることが示唆された。

## 3. 「TV のチカラ」

「スクープサミット」に比べると、最終的に事件解決に貢献するのであれば、超能力捜査を積極的に批判はしないという態度が特徴的であったものの、超能力捜査の信憑性については懐疑的な意見が大半であった。また、超能力捜査が間違っていた場合の責任や、一般人の人権侵害に対する疑問もあった。

### 1) 超能力捜査に対する懐疑

少数ながら、「3人全員が同じような結果を透視していて、とても驚い

た。特に、全員が『彼女は埋まっている』と同じような外観のダムを透視していたことに驚いてしまい、寒気が走るほどだった」など、以下に整理した矛盾点などにまったく気づかず、超能力捜査を全面的に信奉する回答も見られたが、大半は懐疑的・批判的な意見であった。

### ①編集・捏造の可能性

まず、視聴者にはわからない形で、編集・捏造が行われている可能性が挙げられた。「放送時、発言の中で明らかに外れていると思われるものはカットしているのではないか」、「3人の透視結果が口裏をあわせたかのようになり一致している点も気になる。まるで、目に見えないカンペにそって透視を行っているように見えた。番組側は、透視を依頼するより前に、有力な情報をすでに関係筋から得ていたのではないか？ さらに、湖の搜索結果は次回の番組で、というお約束のパターンにはガックリきた。その間に新たなネタを仕込むのか、などと勘繰りたくなってしまう。万が一、透視結果がハズレでも、おそらくその言い訳になるような理由を用意してあるのだろう」、「3人のポーランド人は、皆そろって『彼女は死んでいる』と断言し、描く絵もほとんど一致していたのには驚いた。しかし、それは、『超能力のチカラ』による一致ではなく、スタッフによる『TVのチカラ』が及んでいるのでは…と考えてしまう。また、『土に埋まっています！』といいながらも結局、遺体らしきものは発見されなく、それを必死でかばう方向にもっていった制作側も大変だったろうに…と思ってしまった。番組の趣旨に合わない結果が生じると『私たちの知らない何か…』にかこつけて、番組は終了してしまうが、『私たちには及ぶことのできない何か、に及ぶのが超能力だろうに！！』と叫びたくなる」などである。

また、「番組側が唯一でっち上げられないものは、『行方不明者の発見』である。その部分が抜けてしまっているのでは、やはり見ている側の疑念は消えない」という指摘もあり、編集・捏造が不可能な絶対的事実を取り上げない限り、懐疑的態度は維持・強化されることが示唆された。

## ②外国人の起用

超能力者として登場したのがすべて外国人であったことに、疑問が多かった。「西洋の超能力者と日本の超能力者とは、説得力が違う。なぜか日本の超能力者は嘘っぽくて、でたらめのことを言っているようだが、西洋の超能力者は真実味がある。超能力大国ポーランドという言葉に影響されたものかもしれない」という信奉に寄った態度も見られたが、大半は批判的な回答であった。たとえば、「このような番組で登場する超能力者はいつも外国人であるのが気になる。日本人はなぜいないのだろうか。予想が外れたときに外国人ならば所在が明らかでないので、苦情が来ることもないからだろうか」、「超能力者を、全員海外の、しかも白人を使っていることが気になった。これは、日本人の超能力者より、外国人の方が視聴者を信用させられるのではないかと思った」、「外国人の方が、何となくそれっぽく見えるのかもしれないと思った。もしかしたら、『外タレ』を使っていたりして…なんて思ってしまう」などである。

## ③曖昧な表現

「ヤツコフスキーの言っていた『ネガティブなイメージを持っている』という曖昧な言葉は誰にでも言えそうだし、ダウジングを行ったヤツェックの言葉の表現もどこか曖昧な印象を受けた。曖昧さを使うことによってどんな事実にも適応させようとしているのかなと思った」、「イラスト自体ぼんやりとしたものなので、どのようにでも解釈できると思った」、「ハンナは、死体は奥深くに埋められていると話していたのに、なぜ場所についての説明があんなに大雑把なのかも疑問だ」など、透視結果がいかににも解釈可能に表現されていることに疑問の声が寄せられた。

さらには、「具体的にどのような能力なのか、何を使うのかなど、超能力者に関する説明も不十分だった。視聴者が、超能力というものをある程度知っていることを前提とした説明にとどまっていたような印象を受けた。もしくは、あえて超能力に対して詳しい説明を入れずに、曖昧にしているのかもしれない」など、番組制作サイドが意図的に明確な説明を避けてい

るのではないかという推測もあった。

#### ④強引な結論づけ

「最初の超能力者ヤツコフスキーは『付き合っている2人の男性のうち1人の男とは金銭的な大きな契約を交わしている』と透視したが、実際には琴子さんと男性との間の保険金の契約は成立していなかった。放送では実にあっさりそのことを処理していたが、これは透視が外れたということである。このように、透視が外れたことは視聴者に気づかれないようにオペラートに包むように放送するという番組の姿勢はとても不快である」、「黒いバッグも、まるで超能力者の証言を裏づけるために、後から別に撮影されたものを挿入したような印象も受けた」など、透視が外れているにもかかわらず、強引に当たったとする番組構成に不信感が寄せられた。

#### ⑤3名の霊視の矛盾

3名の超能力者の透視結果が一致したという番組構成になっているが、細かい点で矛盾があることを指摘した回答も見られた。たとえば、「琴子さんを殺した犯人について、3人とも微妙に違ったことも気になった。ヤツェックは『友人』と言っているし、ヤツコフスキーは『2人の男性』、ハンナは『不倫相手』に、それぞれ琴子さんが殺害されたと言っていた。このズレは何なのだろうか。絵など、当たったことに関してはテロップまで出して騒ぐのに、外れたことやわからないこと、検証不可能なことなどは避けているような気がした」、「3人の透視に矛盾がある。2人の男がいると言っていた人もいれば、夫と別の男性がいると言っていた人もいた。事件に関係する人の霊視をしているのだから、ここは3人の意見が一致していて欲しい」「3人中1人が、少し違う発言をしていたのが気になった。ところが『3人の透視が一致した』と、大きくくくられていた。これには落胆を覚えた」などである。

#### ⑥権威づけ

本番組では、超能力者として登場した3名のうち、クシストフ・ヤツコフスキーについて、ポーランド警察の捜査に協力し、数々の難事件を解決

しているという紹介がなされており、警察という国家権力が権威づけに使われている。「ただの占い師が何かを予言しただけだと嘘くさいと感じるが、警察に多大な信頼を寄せられ、600件以上の事件を解決しているという事実を聞くと、超能力を信じざるを得ない感じになった」、「国家警察が捜査を依頼し、国家が認める超能力者と紹介されていたので、この事実は本当だと思った。もし、これがすべて虚偽だったらこのテレビ番組を続けていくのも難しいと思うし、国家警察が依頼しているかどうかは、調べればすぐわかると思うので、事実を放送していると思った」といった回答から、国家権力が超能力を信じさせる要因として作用していることがうかがえる。さらに、「ヤツコフスキーの後に番組に出てきたヤツェックとハンナに関しては、実績を紹介するVTRがなかったせいか、うさんくさく感じた」などの回答からは、超能力に対する懐疑的態度を前提としながら、国家権力の裏づけによって容易に翻る可能性のあることを示している。

その一方で、わざわざ外国の国家権力を権威づけに用いているところに、疑わしさを感じたとする回答もあった。たとえば、『「これまで何百件の難事件を解決させた」とか、『警察にも捜査の協力を依頼される』と聞くと感心してしまうが、そんな証拠などどこにもない』、「世界的に有名な研究者やその道のプロと言わせるかのような人達を世界から招集することで、すでにその番組で取り扱われる行方不明問題自体が国境をこえた大問題であるかという錯覚を作り出しているように思う」、などである。

#### ⑦他の未解決事件との矛盾

多くの回答者が疑問に思ったのは、本当に超能力捜査が可能であれば、世界中の多くの未解決事件は解決されているであろうこと、本番組でも、他の事例（本研究の分析からは除外）には超能力捜査を用いていなかった点であった。たとえば、「そこまで強い超能力を持っているなら、北朝鮮拉致問題でも来てもらえばいいと思うのだが、どうして依頼できないのだろうか。何でも超能力で解決できるなら、行方不明者はいなくなるし、謎に包まれた事件はなくなると思う。でも、事実そういう未解決事件はたか

んあるということから考えると、やはり超能力を怪しいと思ってしまう」。「超能力捜査を三人目の事例にだけ取り入れていたことに非常に疑問を感じた。本当に失踪者を捜索したいのなら、一人目と二人目にも超能力捜査を取り入れているはずだ」などである。

## 2) 超能力とバラエティの相互地位剥奪効果

マス・メディアの社会的機能の一つに、取り上げた事象や人物の知名度を高め、地位を付与するという機能がある (Wright, 1960; Lazarsfeld & Merton, 1960)。しかし、本研究では、バラエティ番組が超能力を取り上げたことによって、逆に超能力の地位を低下させたことを示す回答が見られた。たとえば、「テレビに出てくることによって、どうしても嘘っぽく、安っぽく見えてしまう。もし本当に超能力や透視能力を持った人間がいるのなら、テレビなどのマス・メディアの場には出てくる必要はない。超能力を用いた事件解決はすばらしいことだが、それをまるでエンターテインメントのように大げさにテレビ番組として仕立て上げるメディア側も、またこのような番組に協力して出てくる超能力者にも賛同できない」などである。

また、その一方で、超能力捜査を用いたことが、番組の方の信頼性を低下させたとする意見もあった。「超能力者が出てきたときには思わず失笑してしまった。まず超能力という科学的に証明できない力に頼っている時点で、その問題自体が軽んじたもののように思われる」、「超能力や占いなどいかに超能力者や占い師が実力を持っていたとしても、その論理的でないものを取り入れるだけで、番組がバラエティ的に見えてしまう気がする」、「この非現実的な方法を用いて捜査することが番組に対する信憑性を下げている要因のひとつだ。ただの失踪人物捜索番組であれば進展がなければ、だらだらと放送が終わってしまうだけであるが、超能力や透視は視聴者をひきつけるための番組側が用意した手段であると思う」などである。

すなわち、テレビ番組で大々的に取り上げられることが超能力の地位を剥奪し、また、超能力を用いたことが番組自体の信頼性を低下させるとい



う、相互地位剥奪効果ともいえる悪循環に陥っていると推察される。

### 3) 番組の意図への着目

本番組の目的は事件解決であり、社会的に貢献する側面が評価された。その一方で、厳密にはニュース報道番組ではなく、研究1でも明らかにされたように、制作手法はバラエティそのものであり、テロップやBGMなどの加工も多く、ドラマティックなナレーションも多用されている。しかし、内容は実際に発生した失踪事件や殺人事件などを扱っていることから、番組制作の娯楽性と内容のシリアスさとのギャップに違和感のあることが挙げられた。

#### ①社会的貢献の評価

本番組の目的は、単なるエンターテインメントではなく、事件の解決とされている。実際、番組中で、ポーランド警察の「超能力を信じるとか信じないではなく、事件を解決することが最も重要なことである」という発言を紹介しているが、この発言に共感したという回答が見られ、超能力捜査のプロセスはどうあれ、こうした社会貢献の姿勢はポジティブに評価される傾向があった。たとえば、「このような超能力が本当に実在するものなのか、またそれがどれほど信憑性のあるものなのかはわからないが、こういった事件の解決に役立てるものであれば、超能力者と呼ばれる人々に協力してもらうことはとても意義のあることだと思う。家族にとっては、事件が解決し、真実が明るみになるのならば、その方法が現代的で科学的に実証されたものであっても、超能力のようにそうでないものであっても、関係のないことだと思う」、「超能力を信じていなくても、たとえそれが科学的に証明できないようなことであつたとしても、警官が言っていた通り、事件が解決すればそれがもっとも優先されるべきことなのかもしれない」などである。超能力に対して懐疑的であっても、社会貢献が目的であれば容認するということであり、すなわち、番組の結果が向社会的である場合は、プロセスの論理性や科学性の追究を放棄し、複雑な問題解決を放棄す

る可能性があると考えられる。

## ②実在事件をバラエティ番組で扱うことに対する批判

「ニュースで取り上げられるならまだしも、このようなバラエティ番組での失踪調査となると、その信頼性や信憑性に疑問が残る。バラエティ番組で深刻な話をするとうとうも作り上げた話のような気がして仕方がないのと同時に、もし作り上げたものとしたなら気持ち悪いという気分をぬぐえない」、「人の生死を『遊び』『バラエティ』としてしか扱っていないのではないか」、「親族の失踪という、本来悲しむべきはずのことが、番組内ではエンターテインメントとして面白おかしく語られていたのが非常に気になった」など、失踪事件や殺人事件などのシリアスな内容を、バラエティ番組で扱うことに対する批判が寄せられた。

## ③センセーショナリズムに対する批判

また、番組の加工・演出が過剰であるという批判もあった。大別すると、出演者の表情や発言、カメラワークや画面の加工、一般人の悲劇を視聴率に利用する姿勢に対する批判である。

まず、出演者については「出演者が眉間にしわを寄せていかにも『すごく心配しています』といったような様子が見て取れて、見ていて不愉快だった。また、コメントも大して意味のないものばかりで、スタジオにあんなにコメンテーターがいる理由がわからなかった。超能力者の透視結果を受けても、全員が全員、真剣な顔でコメントをしていて、家族の方に逆に失礼なのではないか、とまで思ってしまった」、「やらせではないにしても、過剰にうるさい会場、出演者のわざとらしい反応・・・見ていてとても不愉快に感じた」などである。

カメラワークや画面の加工については、「こういった番組に出てくる超能力者のうさんくささを、登場するときのカメラワークが更にあおっているように感じられる。銅像の前で無意味に決まったポーズを取っている姿を見ると、超能力者というよりはショービジネス、マジシャンといった風情であり、『私はインチキで格好ばっかりのお金で雇われたタレントです』

と言われているような気がする」,「番組をコンピューターグラフィックの多彩な効果によって演出している技術は素晴らしいと思うのだが、放送内容がそれについていけないように感じられた。まわりをゴチャゴチャと飾り立て、中身は未解決事件と非放送ばかりで、てんでカスカスである」などである。

悲劇を煽る番組姿勢については、「いかに悲劇的かという事例をもってきて、さらには家族まで登場させ番組でお願いをさせる。そしてリアルタイムで放送することで、臨場感と緊迫感、番組が依頼者に対してどんなに真剣に問題に取り組んでいるかという姿勢を見せる。これは問題を解決に導くための様々な手段だと思わせて、番組の内容を大きくし、視聴者の情を煽って、正常な判断を鈍らせる騒がしい場内を演出し、視聴者を番組に引きつける報道者側の作戦だと思う。誇張しすぎて、お涙頂戴的な番組の制作手段がありありと見えてしまって、どうしてもしらけてしまう」,「こういう番組は好かない。自分の家族が行方不明になっているとしたら、どんな手でも使って探そうとする気持ちは分かるし、そのためになら協力してあげたいが、そういう視聴者の気持ちを逆手にとって、『感動話』『悲劇』を作り出して、視聴率を集めているのだとしたらひどい話である」などである。

#### ④未解決に対する批判

放送中に解決まで至っておらず、捜査はそのまま持ち越しとなっているが、解決できないのであれば、番組の目的を果たしたことはならず、その点にも不満が募ったようである。単純に結論を知りたかったという興味から、結論を先延ばしにして視聴者をつなぎとめようとする意図が見え透いているといったシビアな意見まであった。たとえば、「番組内で遺体が埋められていると見られるダムの場所まで割り出したのに、『今はまだ氷が張っていて搜索できない』なんてオチが、次回以降も視聴者を繋ぎ止めておくための制作者の意図なのではないのかと思った。シナリオ通りの運び方という感じがどうしても出ている」,「番組があまりにも『超能力』を

正当化しようとするので、かえってうさんくさが目立っているように思う。そんなに信用しているのなら、冬でも何でもいいから早く湖の中を探索してほしい。これだけ期待させておいて、結局『搜索継続』ということで見つからずじまい。番組にするのなら完結したものをしてほしい」などである。未解決のまま放送が終了したことで、番組に対する不満が残った上に、超能力捜査の信頼性も低下したと推察される。

#### 4) 弊害や危険性の察知

指摘された弊害の危険性は、冤罪、プライバシー侵害、家族への影響である。具体的には、「超能力者の予想が外れた場合でも、本人もテレビ局も責任をとることはなく、言いたい放題で終わってしまっている」、「番組の流れ自体も、女性は既に殺されており、行方をくらましている夫が関係しているように動いていった。搜索されている女性の生死まで透視で結論を出してしまうのは、真剣に捜している家族の方々に対して配慮がないように感じた」、「いかにも夫が犯人であるかのように視聴者に思わせたが、超能力で言い当てられた情報が間違っていた場合、それは情報操作として罪を問われないのだろうか」、「超能力者だったら、なんでも好き勝手に物事を言っているのかどうか疑問に思った。万が一、透視が間違っていたら本人のプライバシーを傷つけることになるのではないだろうか。もし、その透視結果が正しかったとしても、本人の承諾なしに、彼女のプライバシーを番組で話しているのかとても疑問に思う。番組終了後、家族に対する周囲の反応はどうなるのか、気になってしまった」などである。

#### 5) その他

「いつもこの番組を見て、スタッフさんが本当に大変だなと思う。出演者や霊能力者はテレビの前で語ればいいが、スタッフさんは地面を掘って死体を捜したり、湖を探索したり、当たっているかどうか分からない霊能力者の言葉通りに毎日毎日（おそらく）収録日まで放送できるものを得

るために頑張っている姿を見ると大変だなとしみじみ思う」といった、番組制作の裏側に思いを馳せる回答も見られた。

## 全体的考察

研究1の結果は、近年の不思議現象番組は真偽を追求せず、娯楽性や、カウンセリングなど、ポジティブなコンテキストを強調する傾向が強いという指摘（小城ほか、2007）と整合的である。研究2の結果は、3番組を通じて、不思議現象に対する懐疑的態度は共通しているが、テレビ番組の評価で特徴的であったのは以下の6点である。

### 1. 不思議現象の可視性

「TVのチカラ」「オーラの泉」は、一般人には不可視な霊能者の霊視に基づいているのに対して、「スクープサミット」で提示された不思議現象は、具体的な写真や映像を根拠としていたが、そこに多くの批判が集中し、証拠のずさんさや疑わしさが指摘された。技術革新によって一般人にも映像加工が可能になった現代においては、映像や写真の説得力が低下し、捏造の可能性が視聴者にも明白であるためと考えられる。逆に、霊視のように、一般人に不可視な不思議現象は、客観的な証拠を提示できないと同時に、捏造であることも証明できないため、信奉の余地を残しているものと推察される。

### 2. 信頼性の根拠

通常は、権威づけは説得効果を高めるもので、そのように作用していた側面も見られたが、多くの回答からは、「スクープサミット」に登場した「中国政府」や、「TVのチカラ」に登場した「ポーランド警察」というように、実在の機関を信頼性の根拠とする番組構成が、かえって警戒心を高め、信頼性を低下させていた。すなわち、殊更に権威づけを行っているの

は、番組内容の信頼性が低いと解釈されたと推察される。これらのことから、バラエティ番組のように、提示するメディア自身の信頼性が低い場合は、権威づけは逆効果となる可能性が示唆された。

### 3. 番組の目的

「オーラの泉」はカウンセリング、「TV のチカラ」は事件解決と、社会的効用を目的としている点で、不思議現象が比較的容認される傾向があったが、「TV のチカラ」では、結局事件は解決していないため、社会貢献を評価するよりも、超能力捜査を批判する方が多かった。一方、娯楽性に特化した「スクープサミット」は社会に貢献するものではなく、視聴者の知識欲の充足も不十分であった。また娯楽番組としても視聴者のニーズを充足しておらず、不満を高めたと考えられる。

利用と満足研究では、「気晴らし」、「人間関係」、「自己確認」、「環境監視」の4類型が挙げられているが、インターネットなどが普及して、受け手の主体的な情報探索が可能になった現代では、テレビに対しても、視聴と引き換えに相応の報酬を求める傾向が強くなったと推察される。「オーラの泉」が懐疑的態度を前提としつつも、比較的容認されていたのは、普遍的宗教性への転換、癒し効果、メディアに露出することを職業とする芸能人の魅力などが付与されており、霊視という不思議現象を除外しても成立する番組構成になっているためと推察される。一方、「スクープサミット」、「TV のチカラ」は、いずれも不思議現象の結論を出さないままに終わっており、薄い内容を派手な演出で粉飾しているという不信感につながった上に、知識なり、自己確認なり、2時間の視聴によって得られたものがほとんどなかったことが不満の主な理由と考えられる。

### 4. センセーショナリズム

センセーショナリズムとは、内容と提示の仕方の二側面がある（大井、1993）。恐怖や驚愕、悲劇などの内容を取り上げ、テロップやBGMなど

を多用した「スクープサミット」および「TV のチカラ」はフィクション性とバラエティ色が高まり、信頼性が低下したと考えられる。昨今の視聴者にはプライバシー意識も強く、「TV のチカラ」のように、一般人のプライバシーが見世物にされることに対して、抵抗が強いようである。一方、センセーショナルリズムの点で「オーラの泉」に対する批判が少なかったのは、テロップなどの加工が少なかった上に、メディアへの露出を職業としている芸能人を扱っていたためと考えられる。

## 5. 弊害の可能性

「オーラの泉」では靈感商法につながる危険性、「TV のチカラ」では超能力捜査による冤罪やプライバシー侵害、家族への影響などを危惧する声があった。

## 6. テレビに対する懐疑的態度と現代的なテレビの見方

3 番組の分析を通じて、視聴者の意識の根底に共通していたのは、テレビ、特にバラエティ番組に対する懐疑的態度と、現代的なテレビの見方である。すなわち、視聴者は、提示される情報はすべて捏造である可能性を常に念頭に置いており、番組の目的は、視聴者に対する利益よりも、視聴率獲得やタレントのイメージ・アップにあるという構えを強固に維持する傾向が認められ、番組制作の裏側まで推測することが、もはや習慣になりつつある。社会的効用を目的としていた点で評価された「オーラの泉」、「TV のチカラ」でさえ、カウンセリングや事件解決のプロセスを番組化することに対して批判的な回答が得られており、どれほどの社会貢献を掲げても、テレビで取り上げた時点で商業主義と見なされる側面が強いと考えられる。

## 今後の課題

本研究では、任意に選定した3番組を対象に内容分析を行い、視聴者の反応を質的に分析した。本研究の結果からは、一方的に不思議現象を肯定するテレビ番組に対して、視聴者は懐疑的態度を強固に維持することが見出されたが、今後の課題として、不思議現象を否定する内容の番組や、あるいは健康番組のように科学を装って不思議現象を提供する番組も研究対象に含めることが必要である。

### 注

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第48回大会にて発表された。
- 2) 本研究は、科学技術補助費(若手研究B;課題番号20730406「不思議現象とマス・コミュニケーション」)の助成を受けた。
- 3) 本研究の実施にあたり、聖心女子大学59回生の橋本郁子さんに、テレビ番組の内容分析をお手伝いいただきました。記して感謝いたします。

### 引用文献

- 朝日新聞(1974). 動じず続行の局も一超能力番組問題 東京本社発行版第14版 1974年5月23日朝刊 p. 19
- 堀江宗正(2007). 日本のスピリチュアリティ言説の状況 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会(編) スピリチュアリティの心理学 せせらぎ出版 pp. 35-54.
- Janis, I. L. & Feshbach, S. (1953). Effects of fear-arousing communications. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 78-92.
- 菊池 聡(1995). 不思議現象が開く心理学への扉 菊池 聡・谷口高士・宮元博章(編著) 不思議現象 なぜ信じるのか こころの科学入門 北大路書房 pp. 1-18.
- 小池正春(1996). TBS 超能力番組の不思議 エンターテイメントに携わるテレビマンに求められる番組制作スタンス 放送文化, 1996年9月号, 140-141.
- 小松健一(1994). ムスタンの真実―「やらせ」現場からの証言 リベルタ出版
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩(2006). 不思議現象に対する態度の探索的研究 聖心女子大学論叢, 107, 39-78



- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2007). 不思議現象とマス・コミュニケーション：レビューと問題提起 聖心女子大学論叢, 108, 35-69.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2008). 不思議現象に対する態度；態度構造の分析および類型化 社会心理学研究, 23, 246-258.
- Lazarsfeld, P. F., & Merton, R. K. 1960 *Mass Communication, popular taste and organized social action*. In W. Schramm (2nded.), *Mass Communications* (pp. 95-118) New York: Institute for Religious and Social Studies. (犬養康彦 (訳) 1968 マス・コミュニケーション, 大衆の趣味, 組織的な社会的活動 W. シュラム編 学習院大学社会学研究室訳 新版マス・コミュニケーションーマス・メディアの総合的研究 (pp. 270-295) 東京創元社)
- 松井 豊 (1997). 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池 聡・木下孝司 不思議現象 子どもの心と教育 北大路書房 pp. 15-36.
- McQuail, D., Blumler, J., & Brown, J. (1972). The television audience: A revised perspective In D. McQuail (Ed.), *Sociology of mass communication*. (pp. 135-165) Penguin (デニス・マクウェール, ジョイ・G・ブラムラー, ジョン・R・ブラウン 1979 テレビ視聴者一視点の再検討 デニス・マクウェール (編著) 時野谷浩 (訳) マス・メディアの受け手分析 (pp. 20-57) 誠信書房)
- Meehl, P. E. (1956). Wanted: A good cook book. *American psychologist*, 11, 262-272.
- 大井眞二 (1993). センセーションナリズムを考えるーアメリカ・ジャーナリズム史の文脈からー マス・コミュニケーション研究, 43, 45-62.
- 坂田桐子・岩永 誠 (1998). 超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究 (2) —社会・心理的要因の影響を中心に—広島大学総合科学部紀要IV理系編, 24, 87-97.
- 白石信子・井田美恵子 (2003). 浸透した『現代的なテレビの見方』 放送研究と調査, 5月号, 26-55.
- Sparks, G. G., Sparks, C.W., & Gray, K. (1995). Media Impact on Fright Reactions and Belief in UFOs: The Potential Role of Mental Imagery. *Communication Research*, 22, 3-23.
- 館澤貢次 (1993). テレビの「やらせ」を衝く 日新報道
- Wright, C., (1960). Functional Analysis and Mass Communication, *Public Opinion Quarterly*, 24, 605-620.